

備  
中  
兵  
亂  
記

# 解題

備中兵亂記 三卷

著者 未詳

此書、備中兵亂記と題するも、主として備中松山城主三村修理進元親が、織田信長に應じ、不俱戴天の仇敵たる宇喜多氏を滅はんとせしも、その一族たる同國成羽城主三村孫兵衛親成父子はこれに従はず、元親由りて親成父子を誅戮せんとせしより、親成即ち毛利氏に訴へて、その保護を仰ぎしかば、その結果元親毛利氏の征討を受くることゝなれり。故にこの戦争たる三村對毛利の戦争なるも、亦一面には識田對毛利の中國戦役の序幕といふべきものにして、中國戦史を講ずるものゝ、必讀の書なりとす。

此書、その著者を詳にせざるも、その記する所能く當地方の地理を明かにし、又三村家を知れるものにあらざれば能はざる所なれば、思ふに三村家遺臣の筆に成りしものか。

本書上・中・下の三卷に分ち、上卷には先づ此戦争の起因と、藝軍殺到の次第と、手莊・新見杜・山田鬼身屬城の没落を叙し、中卷には松山城の包圍攻撃と落城を叙し、下卷には元親及びその子勝法師丸の最期と、兒島常山城の没落に及ぶ。

今回刊行せるものは、高取君所藏の古本にして、之を在來世に行はるゝ史籍集覽本に比較するに、文辭稍々拙劣にして、技巧粉飾彼に及ばざるものあり。之れ恐らく、史籍集覽本よりも、原本に近きの故なるべし。但し、集覽本は、文政七甲辰年朽木侯泰網の書寫に係り、類書中良好のものなりとは、世既に定評もあることなれば、同書との異同の點は、總て之を挿み、彼此對照の便に供したり。

\*

十一本以下を簡  
單に左の如く  
の理也爰に轉  
家の守護松葉  
住の三村修理  
進の親先父之  
めが爲よし  
な謀叛をよ  
をた其濫觴  
を尋るに將  
西國へ御下  
軍義略する  
あつて中國  
御歸洛の謀  
也と聞えしか  
ば平信長驚き  
謀を廻し當國  
立備後密使を  
由計策急なり  
元親一族馳集  
なり其故は幸  
三村備中守家  
親果半宇喜多  
數に遺恨を含  
一へども宇喜  
前徳河内守備  
比家親を忍  
國佐井田の當  
子に働き入り嫡

# 備中兵亂記

## 卷之上

著者 不詳

### 元親謀叛之事附藝州勢寄來事

夫人間の盛衰を觀するに、飛花落葉の風の前、電光石火の影の中、有爲<sup>\*</sup>轉變の理は、今に始めぬ事ながら、俄に驚く計也。爰に源氏の末葉三村修理之進元親は、當國の守護職として松山に居城あれば、國中の諸侍松山に出仕して其機嫌を窺ひ、其下知に不隨と云者なし。然るに不圖無好謀叛を企て、一家斷絶有し事は、先父備中の守家親、數年備前國宇喜多と仲悪く、互に權威を争て度々合戦有りし所に、不慮に討れ給ひしかば、其意恨忘がたく、如何にもして宇喜多に思ひしらせて、父の亡恨をも休めんと、斯は思ひ立れしと也。其濫觴を尋ぬるに、將軍義昭公は等持院殿尊氏卿より十三代の御末也。十二代目光源院義輝公は三好が爲に討れさせ給ひしかば、御一類も尋求めて可奉<sup>レ</sup>失とする故に、密に都を忍び出て方々と浪々遊ばし、後濃州に御下向有て織田信長公を御頼み有ければ、別心なく頼まれ給ひ、頓て大軍を起し路次の敵を切崩し、難なく都へ御供して御本意を遂げさせ參せ、將軍に任じ公方と奉<sup>レ</sup>仰給ふ。其勳功莫大也と云へども、都には村井長門守を居置き、諸事の仕置を取行はせ、萬事義昭公思召の儘ならず。夫故いつとなく御仲不快に成て後は、都に御住居も不叶故、西國に御下向有て備後の鞆に御座して、ひたすら毛利家を御頼み有ければ、毛利の家もたやすからずと思ひながら、代々の御家を奉敬て無餘儀頼みまゐらせ、近國を催すに誰も御下知に叛く者なく、中國悉く武命に順ひ、已に御歸洛の謀、頻にこそは聞えけれ。信長公此事を傳聞き驚き、是は安からぬ事共也とて、頓て密に元親に使を立、此度一味有て義昭へ不順隨<sup>ニ</sup>ひたすら西國往返の通路を

備中兵亂記

一

打果す二代の時  
 怨望追討の時  
 一味の誓使時  
 をこそ運たれ  
 急ぎ微連の大  
 樹を攻討ち忠  
 を盡し功を立  
 て信長の助力  
 を以て宇喜多  
 一族を責滅し  
 一家讐憤の眸  
 を可開と躍り  
 上にも一議す中  
 にも同國成羽  
 云々。  
 \* 遠藤の家  
 い、遠藤の家  
 親を狙撃せし  
 らず興禪寺な  
 り。  
 \* 遠藤は宇  
 喜多の族人に  
 あず家親狙撃  
 の功に依りて  
 浮田氏を賜は  
 りしなり。  
 \* 義は、今信長不  
 ぞ可治利へ  
 逆心に翻る志  
 人たる行跡に  
 非ず將に頼を  
 掛て何か益あ  
 らんと義を専  
 誠と盡して雖  
 諫議すると雖  
 云々(イ)  
 \* 一族此諫  
 を惡み既に誅

指し塞ぎ、近邊を攻討て歸洛を妨げ、當家へ忠節あるにおいては、頓て信長大軍を以て出馬せしめ、中國筋追討不可廻踵。然らば備中備後兩國の分は元親支配たるべし。其上何事に依らず望の儀末代如在有間敷と、堅く誓紙を以て頼むよし被仰遣ければ、元親一族馳集り、是は願ふ所の幸也、其故は家親公宇喜多と數々戰ふ内、終に勝利を失ひ、結句、作州の内此方へ歸服の侍數多有る故作州へ出馬あり。數ヶ所敵の城を攻落し、威光盛に佛教寺迄働入りに、一戰の勝負には不叶故、浮田一族遠藤河内守、備前の徳良の城に有りながら家親公を忍び討ち、無念也ける事共也。剩へ其費に乗て當國佐井田の庄に働入て、又嫡子元祐を打果す。二代の怨敵恨骨髓に徹し、宇喜多一族を討果すべき工夫に、日夜心を碎き時を相待つ所に、今度信長公の誓紙幸と覺ゆる也。將軍へ力を合せ都へ本意有とも、人並の儀にて分けて忠にも成るまじ。まして宇喜多も御催促に隨はゞ、吾身の讐憤散せん事少も無益理也。當家は夫れに引替て運の末成る將軍を急ぎ責討て、忠節を勵み、信長公の助力を以て宇喜多一家を責滅し、數年の本望を一時に可達と、躍上て手に取る様に評議せり。中にも同國成羽の城主三村孫兵衛尉親成・同嫡子孫太郎親宣、曾て此儀に不與。父の怨を討給はん何ぞ他の力をからんや。凡武士の道は忠孝に止て仁義を宗とすべし。縦へ君々たらずと云へ共、臣は臣たるべきを道とすべし。信長時の難を遁れん爲に當家をかたらふ。虎狼の謀に隨ひ、將軍家へ敵對して、一家不義の逆臣とならん事口惜かるべし。信長の行跡を承るに、一度は將軍に頼れまいらせ、御威光を假て五畿内迄隨へ、後には將軍家をかるしめ奉り、逆心を宗として、終には都を追ひ出す、我儘の振舞、人たる法に非ず。斯る大將に頼をかけて何の益かあらんと、義理專に諫言を致しけれど、良藥は口に苦く、忠言耳に逆ふ習にて、元親を始め、舍弟宮内少輔元範・上田孫治郎實親に至る迄、此諫を不承引。當家の運を開き、本意を遂べき時至りぬと存する所に、一族の身として忽に心をひるがへすは奇怪成る申様かな、縦へ利運成りがたくともそは兼て覺悟の所也と、以ての外に腹立有り。已に誅戮せんすけしきに見えければ、親成父子驚きながら、恐れ入たる氣色にて、先づ其座をぞ立にける。一座に有りける諸侍、とかく親成を引返して一家和睦有て可。然御事と、色々意見申と云へ共、元親兄弟何れも合點なく、努々其儀叶ふべからずと堅く誓言有ければ、力及ばぬ次第にて、心有る人々は互

戮せんとしし  
驚き親成父子  
十一月七日の  
夜急ぎ軻の津  
の馳參る元親  
親成を引返し  
一族を和陸せ  
しめんと議す  
れども元親の  
令弟宮内少輔  
元範上田孫次  
郎實儀を初と  
敷由既に神祠  
を固しかば更  
に其甲斐な  
りけり斯て軻  
成の父子は軻  
津につき一族  
謀叛の由を訴  
へけり

\* 一、櫓樓を組  
みて櫓をあげ  
屏を云々(イ)  
\* 二、動木を  
埒を結び天羅  
埒を結び天羅  
を打(イ)  
ち柵を掛け低  
け長木をゆり  
たて帆篷を引  
き惣て二十一  
丸(イ)

に目を見合せ、和陸有たき事なり、無<sub>レ</sub>左ば討て捨るか、或は踏み崩すか思案肝要の所ならんに、諸方に敵有<sub>レ</sub>之に又  
近き成羽と不和になり。毛利の家へ注進せられば悔ゆ共益有るまじと、拳を握ると云へども、大將の下知是非無け  
れば、誰以て憚りて申出す者もなく、事延引に及ぶ内、親成父子は虎口の難を免れて、急ぎ成羽へ逃歸り、是は不思  
議、事ども哉。吾身の浮沈は爰也。將軍へ注進して身の難を遁れんと、天正二年十一月七日の夜、急ぎ軻の津へ馳參  
り、元親謀叛の趣委細に言上申けり。

義昭公驚き給ひ、我遠き歸洛の謀を廻す所に、近き足の下に敵可<sub>レ</sub>有とは不思議。此儀如何あらんと、早速御使を  
以て三原へ被<sub>レ</sub>仰遣たりければ、小早川左衛門尉隆景聞きも不<sub>レ</sub>敢、其儘輝元吉川治部少輔元春へ使者を立、御歸洛  
の催しを致す所に、將軍家を蔑にし奉り、當家を輕しめ、膝の下より敵に與する無道の仁をば、事延引して不可<sub>レ</sub>  
叶。誅罰不可<sub>レ</sub>廻時と、流石の隆景、早々山陰山陽四國九州迄も早馬を立て、將軍家の御内書に隆景廻文の添狀し  
て、不<sub>レ</sub>延時日。軻の津へ可<sub>レ</sub>馳上。由相觸れて、則霜月八日には左衛門佐隆景・口羽・福原・宍戸・熊谷歴々馳集り、翌  
日には輝元公出陣にて、程なく笠岡の浦に到着ある。其外追々に諸卒馳加はり、都合其勢八萬餘騎とぞ記しけり。

### 諸軍勢荅松山事附手莊城沒落之事

作州月田山には、元親妹婿崎正忠元兼居城す。松山叛逆の由を聞き、頓て心を翻し、元親所縁の者として疑れざ<sub>イ</sub>  
る先にとて、宇喜多和泉守直家の勢を引籠め、松山へ與せぬ色をぞ露しける。庄の勝資は、早山王に馳出て佐井田山  
を責しかば、叶はじと思ひけん、同十八日には三村兵部之丞を初として、松山へこそは苔みけれ。穂田猿掛の城は  
毎度の合戦に勝利をうれば、暫く相障へしかども、此度の加勢なかりしかば保べき様なく、佐井田と同日に松山へ  
こそ苔みけれ。有漢にも一城あり。多氣の庄には、矢倉・畦・庄田山・野山の城數ヶ所に<sub>イ</sub>放火すれども、松山は事  
共せず、櫓樓を組み屏をぬり、左間を切り弩をはり、亂檝逆茂木密にして、惣て二十一丸は犬の潜るべき様もなく拵  
へすまして、十二月七日には、四ヶ村で討取る首數八十七<sub>イ</sub>時に持來れば、元親喜悅して惣門まで出合て、功の深淺

を記し<sup>私イ</sup>有程の 武具衣服等に至るまで思々に遣はし、さて寢所に入て感状或は恩賞一々に宛計らひ、其晩まで一書を親め、明るを遅しと遣しける。祿賢不愛財、賞功不踰時、と云ふことをや思はれけん。

藝州の大將衆は、笠岡にて晝夜<sup>三十日</sup>評議せり。爰に元親を最負には思はれざれ共、御弓矢の始終を大事に存する武士、此時若元親懇望に於ては一先づ扱にも懸らるべしとや囁ける。隆景進出て被申けるは、<sup>各</sup>御思案尤にては候へ共古人の云ひ置しも、可擧をあげず、可罪をつみせざれば、大將の僻なりとこそ聞ゆれ<sup>承り候</sup>。今度元親謀叛を企る所、宥して置かば諸國の武士皆見るを見真似に致すし。たとひ人數を損じ費すとも、誅罰すべきに非ずや

と宣へば、實にもと思ふも不<sup>感</sup>思も皆一同に感じける。去らば先端城を殘し置き、松山に馳せ向ひ、手を碎き粉骨をつくさば、落城程あるまじ。端城は不<sup>三</sup>攻とも敗北すべくと評議すれば、輝元聞き給ひ、いや／＼松山何と聞ても左

様に弱くは有るべからず。強て松山へ押寄て、徒に士卒を損じ何かせん。弱き端城を松山と心得責たらんには、なにかは勝利を得ざらんと、理非分明に宣へば、衆儀一同に甘心せり。時に三村孫兵衛親成は、三百餘騎にて馳せ参り、某、國の案内、城の險易、勢の多少、能存て候也。先陣の中に被<sup>感</sup>加候はゞ、如<sup>三</sup>形忠節を可<sup>三</sup>盡と軍訴をこそは致しけれ。吉川小早川各感じて、頓て鞆の津へ飛脚を以て及<sup>三</sup>上聞し<sup>三</sup>かば、軍始めて吉祥の訴訟重疊の忠義也とて、名馬御劍を被<sup>下</sup>たり。親成面目を播<sup>トコロ</sup>しけり。然ば軍勢を配分して敵の端城を屠り捨つべしと、十二月二十三日<sup>手</sup>の庄の城國吉の城へ押寄す。彼城主三村右京亮政親は、元親一族にて無<sup>三</sup>隱勇將也。兵糧乏しからざれば、輒く可<sup>三</sup>落とは見えざりけり。親成父子案内者なれば、斯のつまり彼の難所を凌て、我先にと岸際迄攻寄すれば、内より城主の舍弟三

村大藏・同七郎左衛門・宮ノ内藏大輔・丹下與兵衛以下馳出て、鎗を合する事三五度、敵味方宗徒の軍士手負死人限なし。中にも丹下與兵衛は屈強の敵二人討取て、首二つ鋒に貫きしづくと歸る所を、輝元同朋覺阿彌、生年十八歳に成りけるが、今日の合戦手負死人あまた有と云へども、未だ双方へ印を取るとは不<sup>三</sup>見るに、あの坂口に見ゆる敵、首二つ打物に貫き歸るぞ。あれ引落して今日の軍神に奉らんと、謂ひも不<sup>三</sup>敢追懸て、や、暫し戦ひけるが、無手と組で双方指違て失にけり。又宮ノ内藏大輔は、三村孫太郎が家來有木平内と云者に名乗り合せ、無手と引組み平

\*一、元親當家を蔑にして謀叛<sup>(イ)</sup>  
 \*二、縦利を失ひ家を損すとも<sup>(イ)</sup>  
 \*三、一本弱くは聞えぬぞ軍林實鑑にも辟強以<sup>三</sup>双則<sup>三</sup>双還て折挫す雨滴の微弱なるも消<sup>三</sup>擔<sup>三</sup>下石と見えたり強き松山へ云々  
 四、手ノ庄國吉城へ押寄す<sup>(イ)</sup>

\*一、一鼓一鐘に  
調合て関を噓  
とぞ云々(イ)

\*二、集覽本讓葉  
城を紅葉城に  
作る

\*三、又欠落する  
者もあり漸く  
残る云々(イ)

\*四、別本石持或  
は石指に作る

内を取て伏せ、頸かき切て捨たりけり。平内も剛の者にて下より透間なく二刀刺す。内藏大輔二町計は引退きしが、是も同時に果にけり。其日の軍は、城内の戦稠しければ、寄手の軍兵死する者數多也。流石の大將是程の小城一つになじかはひるむべき、翌日より仕寄せを付け大鐵炮を昇ぎ寄せ、二十九日寅刻には數千騎四方の山に打上り、思々の旗を立て、太鼓\*一を打て関を噓とぞ上にけり。城内の勢少もひるまず、鐵炮矢石如雨放ちかくる。寄手は猛勢なれば彌々不屈、城際に蹄を並べ、屏をきしつて持柄をつき、息をも不繼責寄すれば、大晦日の夜半計に落城す。去れども彼一族は恙なく取退きけり。鷄頭の城も、明れば天正三年五月朔日に松山へこそ答けれ。其勢電霆の響く如くなりしかば、松山勢大半色を失ひ、小屋中の人夫等皆震ひをのゝく事限なし。元親一身の覺悟故、かく成行くぞいたましき。

### 新見讓葉城落之事 附流刑之事

明れば天正三年の元三七ヶ日も打過ぐれば、去らば年始に新見の城を責て、新年の慶賀せんと押寄たり。此讓葉の城主三村元範は元親の弟也。縦へ松山は落すと云へ共、此城は不危。其地理は天より釣たるに不異、人の登る便りなければ、無數の名城也。然るに元範、一人當千と頼み思はれる富屋大炊之助・曾爾・八田以下忽に翻て、正月八日の巳の刻ばかり、敵を諸丸に引入れ、端丸に火をかけ、一同本丸に詰めしかば、元範少も不屈、各々我に忠義を存ぜん者は今此時ぞと云へば、勇士七十騎ばかり物具ひし／＼と堅めて、元範と一所に死を決する覺悟にて立出たり。元範彌々心強く思ひ屏を開き討ち出、鎧を合し突崩す事兩三度漸く其日の戌の刻に成にけり。元範の郎徒或は手負ひ或は疲れ、大半死失せたり。中には甲を脱て降人に出る者も有り。漸く残る兵十人計に討成され、元範も終日の戦に精力盡て息を繼て居らるゝ所に、伊勢の入道と云ふ古老の義を存する者立寄て、腹を切給ふ共、打込の人數と云ひ、夜中と云ひ、分明に人の知る事有るべからず。又夜明る迄は難堪。一先落給はゞ、定て三浦貞廣は年來の御知音なれば、此火さきを見て途中迄御迎に不出事はあらじと、氣色を脊て諫め、石指と云在所へ一里計引退き休ら

\*二死生は不知  
四人矢庭に射  
伏せたり(イ)

ふ所に、藝州の武士多治部雅樂頭五十餘騎にて押寄たり。上は雲に聳<sup>前</sup>え、岷々たる岩なれば、可<sup>二</sup>押入。様なくして、鎗長刀をひらめかし喚き叫べ共、靜り返<sup>テ</sup>て居ける所に、<sup>寄手の中</sup>より(イ)太田と名乗<sup>テ</sup>て荒武者一騎進みけるを、三村左助は平生弓を得たれば、火急の退口なれ共、塗籠藤の弓の曲高なるに、當國に逸る國重が鍛へたる鋒矢五つ箴<sup>イカリ</sup>に指て持たれば、打番<sup>終滿始</sup>ひ(イ)好曳て兵と放ち、眞先に進みたる石州の住人大田源八が太股を射通す。残る矢にても即時に四人射ふせたり。扱元範の前に跪き、御暇乞候とて腹かき切て失にけり。根古屋千番<sup>千イ</sup>以下は切て出<sup>テ</sup>て、或は敵と引組て差違て死するもあり、或は太刀を打折て引もあり。然所に伊勢の入道は進み出、大音にて云けるは、元範此岩の中に籠り給ふと思ひ、斯く手痛くは責るか、元範は松山を心懸て疾く石蟹口へ退きしか共、落延び給はん間、踏<sup>踏</sup>地ゆべしとて(思<sup>堪</sup>ひ(イ))我々四五人殘居候也と云へば、各<sup>旁</sup>ても可<sup>一</sup>遁か、早く參候はんと寄手我先にと差向ふ。伊勢の入道走り向<sup>寄</sup>ふ敵の弓手の腕を切て落し、無手と組ける所に、後より安原顔左衛門に組伏られ、伊勢の入道は果にけり。扱、元範は太刀を抜きからくと打笑ひ、只今伊勢の坊が事をちんじ、松山へ退くと云へ共、爰に殘て候也。我と思はん人々は最後の働き見よやと云へば、吾先にと進み寄る。手本に進む兵を一人切伏せ、三人に手を負はせ、其透間に腹切らんと見廻す所を、遠矢に射ける鋒矢、咽輪の外<sup>玉懸の首</sup>の下(イ)に篋深に立て臥す所を、備後の住人東江平内首を搔落す。痛ましき哉。落城前の日中餘り覺束なく思ひ、女子童迄集め養食を與へ、人々言ひ様など問ひ給へ共、本より不<sup>レ</sup>知事なれば、左右答へる事もなし。誠に負薪の言廊唐の語と、黄石公が書にも有とぞ思ひ合せける。翌日八日の早旦には、近習の者共に夢物語りをぞせられける。今曉の夢に、某が頸<sup>首</sup>を某實檢すと見つる事こそ不思議なれ。聖人に夢なしと云へ共、某は聖人に非ずと、少し心にもや懸らんと覺ゆる所に、流石洞濟兩家の禪意をも問尋あれば、戯<sup>戯</sup>れに取なして大笑なして云く、如何様存命の程久しからじと、女中へも暇乞とて重代の太刀などを送り、其外近習の者共まで、馴染たる言葉の末も今日までとこそ覺ゆれとて、孟二三返巡しける。折節敵の火矢鐵炮雨の如し。去れば三日の内に、元範の首を則輝元の陣に送りける。夢の前表こそは不思議なれ。頓て、元範の首を弟實親の方へ送りける。心は、外には實親の悲歎想ひやる由にて、内意は城を弱らせ、實親に力を落させん爲也。(爲の計略)彼

\*二少しは心懸  
りにもあらん  
ずらんと(イ)

\*三一本戯れ言  
に取成し何々  
と大笑して云々

\*一、軍書にも大軍は莫寧(侮カ)小敵小軍は莫怖(大敵云へば非可侮)とて扱に懸て同十九日云々(イ)

\*二、運命の果なるらんと人々奇み待りけり(イ)

\*三、誠に古語にも生而於捕一期之衆死而不(如)留名於後世と感議あつて則云々(イ)

首<sup>1</sup>の頸鬼の身の城近く迄到來すれば、實親大に怒り、元範存生の時は孝悌の道をも盡せり。生を轉じて以後は追善にしくは有まじ。白骨に對する事思ひも不<sup>レ</sup>寄とて、花光寺の會下に追返し、きらびやかに葬送したりける。藝陣は成羽に越年し、日々に吉左右告げ來れば、酒宴遊興にて正月十五日を送る。十六日の未明には惣陣を鬼の身表へ替へ、羽入道・荒手・水の内・箕腰山・鬼の身の山下五里四方は、野も山も田畑水の上迄も、尺寸の地もなく取塞ぐ。明れば十七日、必本陣よりの下知にもあらざるに、多勢なれば誰魁ともなく、一萬五千ばかり荒手の城へ押寄す。彼城主河西も元親一族にて、元より堅固なる城(固して好)なれば、なじかは無體にとら(論にせ)るべき。寄手散々に追ひまくられ、士卒數多討死す。此由輝元聞き給ひ、數ならん山とは云へども、勿<sup>レ</sup>侮<sup>レ</sup>小敵とて扱をかけ、同十九日夜半前に、備前の兒島へ流刑せらる。翌日二十日美袋の城主民部承忠秀も、川西と一所に兒島へとぞ聞えける。爰に石川源左衛門尉久式は、元親妹婿なりけるが、元親備前に遺恨を含むも、亡父家親の爲なれば正き舅の敵也。如之先久智妙善寺の合戦に討果てしかば、彼と云ひ此云ひ、鬱憤更に不淺とて、一門妻子を引つれ上下三百人計にて、高山を打捨て是も松山の城へ籠りけり。\*二運の果とぞ覺えける。

### 山田鬼身城没落之事

正月二十三日、藝州鬼の身の城に押寄せ、七重八重に取圍て、鹿垣を結て、晝夜四十日の間息をも不<sup>レ</sup>繼責戦ふ。斯る所に明石與次郎と云者、元親譜代の者也。鬼の身の城主(イ)實親は元親の舍弟なれば、此與次郎を添へ置きたり。此者大敵に驚くか、藝陣と心を合せぬると見ゆれば、城中の男女大に周章騒ぐ、實親混雜を靜むれども、はや女性幼き者共は、鞋をはき袂に物を入れ、此彼に奔走す。實親是を見て、扱は制するに及びがたし。其上時刻移らば猶以て明石一黨の者共出で來るべし。唯我一身を捨て、萬人の命を助くべきには不<sup>レ</sup>過と思ひ、敵將へ使者を以て申されけるは、實親一人腹切らば、籠る所の軍兵共扶け置かるべきや。某申條詐りなく、分明に仰を給り候へかし。一命を捨て家僕共の恩賞に行ひ度由被<sup>レ</sup>申ししかば、藝州の大將泪を流し、武の道斯こそ有るべけれと感<sup>三</sup>じて、則返書を認め使者を返

\*、春花秋日を  
待に不異無慚  
なりける云々  
(イ)

\*三太刀半弓鏡  
逆首懸袋弓指  
鎗繪符の類云  
々(イ)

し、諸人の命を助けらる。實親返書を見て安堵の思ひをなす。君子に二言なければ、此上は何の疑か可有。され共松山より付け置る、武士共、其外一家の被官見捨たる様に聞え、元親に罪せらる、事もや有らんと、松山へ一書を残し置き、其外老母へ別の文、哀を催す次第也。去らばとて正月二十九日辰の刻に、自害の模様有しかば、郎徒共相集り、吾身命の扶かる事のみ悦び、主君實親の臨終を急ぐ事無慚也ける有様也。城中の面々物具して三百騎、廣庭に居流れたり。實親諸軍士に對し、今度各粉骨の働き二世迄も忘れがたく、運を開くに於ては恩賞可相計心底も今は空く成果て、他家に俸祿を受けられん事こそほいなければとて、鎧小手鷹當を右の脇に脱置て、女性幼き者にあやしき目は見せしとて二の丸へ下し、近習の者共を見廻し、累年の馴染今度の働き報謝しがたし。夫々に武具繪替の類形見に賦るべしと有けれど、早散々に奪取り一物もなければ、廣瀬引合せと云紙を取寄せ、一重宛賦りて重疊の上に座し、西に向ひ合、手で南無西方極樂教主の如來、父の爲に切る腹なれば如來も濟度し給ふべし。唯今先父源清公と一つ蓮臺に迎へ給へと、高聲に念佛三遍唱へ、大脇差に中巻して左の脇に撞立て、右の脇に引廻し、柄も拳も碎けよと、眞中に押込み十文字に切れば、荒木右京之進と云古老の者立寄り首を打落し、其身も髻切て死骸に添へたり。實親二十の春の花、未だ初春の頃なれば、苔ながらの落花こそ、哀とこそは覺えけれ。斯りける所に、生年十六歳に成ける藤若と云ふ小者一人末座に居て、さめんと落涙しけるが、御供の旁々一人も見えずと云ひも不敬、太刀を抜き敵陣にかけ込み、宗徒の勇士三三人に手を負せ、本の丸へ欠戻りて實親の死骸に倚り懸り、腹搔切て失にけり。貴賤男女に至る迄、藤若が心底感せずと云ふ者なし。其後二月下旬までは、城郭を修補し、城主を差居へ、二十八日には輝元屋形に入にけり。

## 卷之 中

### 松山軍之事

\*一、しどろもどろに混亂して

\*二、足を亂さんとせし所に

\*三、唯其心肅然として

三月朔日には、隆景を初め諸軍勢成羽へ陣を移し、諸方をさげすみける所に、松山の勢廣瀬の陣屋へ馳せ出て、藝州安國寺の僧模首座其外數輩討果しければ、藝州の大將大に驚き、さては此時雌雄を不決ば、所々の蜂起眼前たるべし。去れば彼の陣屋打破らんと、三月十六日卯の刻に、阿部川に打望み玉の渡・四條原・魚梁庭三口へ轡を並べ、一度に颯と打渡し、鷄足山に陣取り、士卒七八十計馳下り所々に放火しければ、廣瀬の陣屋可保に非ず。軍士松山を目掛けて引退り、松山よりは屈強の兵共を坂の麓に八百騎ばかり馳下し、初の程は遠矢に少々射けるが、双方次第に練り寄り鎗届にて相戦ふ、其間に八幡の上に陣取りたる藝州の兵を見かけ、松山よりは高陣の後を忍出て近々と差寄れ共、藝陣は夢にも不知、頼久寺の上へ寄向ふ所に、後より鐵炮二百挺計不意に放ち懸くれば、敵陣肝をけし混亂して四角八方に颯と引く。松山よりは勝に乗て追散し追まくり、鷄足山の麓疋責寄せて鋒より火を發してぞ戦ひける。三村親成が勢初め、諸卒の手負討死する者數不知。松山勢には、神原六郎左衛門尉其外士卒數多討死す。漸く薄暮に及びて双方相引に引退きけり。扱四月四日には、松山より多氣の庄大離の陣屋へ馳出づ。此陣屋每度得利、此時多勢を見がけ自ら放火四日辰の刻に灰燼へ成す。藝陣は多勢也と云へ共曾て案内を不知、味方の勢は小勢なれ共嶮易の通路能く知れば、四日申の刻には敵陣粉々紘々として足を亂しける所に、備後の國の住人檜崎頼左衛門豊景・同彈正忠元兼・木梨元恒・三村親成等取て返し防ぎ戦ふ、其間に諸卒無恙として引退す。暮方後陣より後れて通る人夫共、或は追散され或は討果され陣具多くは城内へ奪取りしかば、籠城の癖にて、少の事をも大に悦び、老若男女さゝやきけれども、元親は唯默然として、閨に入りても帶をも不解、興あれ共酒をも不飲、軍の工夫の外他事なしとこそ見えにけれ。軍士に酒を給はれば、士卒彌々情を感ず。傳へ聞く、唐の越王勾踐伐吳時、醇酒一器を江の上流に注ぎ士卒をして飲ましむれば、皆其情に酔ふとかや。或時近習へ語り給ふは、正月朔日の夢に、一つ閨にて手をぞ打ちけると、亦三日の曉の夢には、みかさのまして鳥のかよはずと、如何様不思議の句也と皆一同に云あへり。扱も數度の合戦に、敵味方粉骨碎身の働き、癡癡張良も消肝有様也。委く記すに不遑。輕部治部・進藤掃部・布施左衛門太夫・同内藏助・渡部・神原・矢内以下、其外宗徒の兵討死の士卒不知數。寄手の兵には、家近十郎・神津

一、箱を震ひてぞ感じける

三、合戦を混へ挑め共藝陣會て取合はず

四、又河原六郎

五、以下小早川

六、以下五行別本になし

七、元來彼二人

八、志變へ易き

九、者にて忽に

十、元親略々察

十一、しけるに

十二、石川源左工門

十三、久式を頼み無

十四、二心由云々と

原棍屋難波大槻數多討死す。是は近里の者なれば往々に記せり。其外備藝防長の兵、此役にて果てし事不可勝計、松山通路の所は石蟹唐松穴田手の庄稻田中野野山多氣の庄古瀬河面に至る迄、日々夜々に相戰ひ討取る所の首數十、十五不記日ひ無かりけり。藝陣小勢ならば保つべきにあらね共、本陣には通路夜討の噂もなく、彌々武威盛に募るは、大軍とは云ひながら、名大將の徳也と皆舌をぞ震ひる。

### 藝陣薙麥事 附松山勢心替の事

四月七日には、松山の乾に當て河西の寺山と云ふ古城、北山へ惣陣を移し、古瀬東西の麥を薙ぎけり。松山城内よりは、爰彼に馳出て混ら合戦を懸くると云へ共、寄手會て取合はず。口羽・兒玉・井上三人一様に云けるは、城中の形勢を考へ見るに、兵糧若自由ならば態とも崩折れたる様に仕成すべき所に、混ら合戦を好む體は如何様落城近かる可く、所詮引退けと下知すれば、城内の者共は此謀は不知、彌々緊く噪ぎ立ける。敵陣は白地と云ふ所へ陣を移し、阿部西野の麥残りなく薙けり。暫く在陣有て四月二十四日、藝陣不殘成羽へ打入る。松山には息をつき安堵する所に、拽地築地上げ馬場を作り、長陣の仕度しければ、松山籠城の兵案の外に思ひ、打寄り二心なき様を相語る。抑、此城は要害能く、水卓散也と太平記にも記せば、不容易の山也。明春迄は持堪べしと勵義盡忠死を一舉に可決と頼母數見えたる所に、元親譜代の郎等に竹井宗左衛門尉直定、河原六郎左衛門尉直久と云者あり。強て比興をたくむべきにはあらざれ共、初め元親思立れ、一時も今戰國の最中にて國の力も弱く、四方に敵滿ちて候へば、能々御思案肝要に奉存と意見申上げられ共、其後元親父子大きに機嫌を背きければ、親成に内縁有し者共なれば、何とやらん少しは隔心にもや見ゆらん。今度籠城にも出丸の一つも必預けらるべき身なれ共、左なれば、心中には恨める心地にて居たる折節、小早川隆景は西國無双の大將にて、勇氣智謀相兼たり。親成を便りとして、若此時忠節を盡さざれば未來に至る迄毛頭疎略無之と、熊野の牛玉に誓紙をして兩人へ密に被申入たりければ、彼二人元來心淺き者なれば、終に志を變じけるこそ無是非一けれ。是とても時至らぬ儀を思立れ、終に敵の足を踏入れぬ國なるに、俄に大軍

\*別本「僅に三人」備中集成志「僅に小者二三人」とあり

\*以下別本彼返り忠の者共久式守禦の天神の丸に法印云々

に被<sub>レ</sub>押入<sub>ニ</sub>て、方々の城々も忠節の甲斐もなく、籠の鳥をしむる心地して、諸人心得がたく、衆議一味せざる故也。去ば天の時不<sub>レ</sub>如<sub>ニ</sub>地之利、地之利は不<sub>レ</sub>如<sub>ニ</sub>人之和<sub>一</sub>と、古人の言葉、今割符の如く也。元親も兩人の色略々察し給ふに、手勢三十人討残し置き用心繁くすと云へ共、誠に國家の興亡は自ら有<sub>レ</sub>時とこそ覺えけれ。彼者共より久式守禦の天神丸を可<sub>レ</sub>討との略なれば、久式留守を窺ひ天神丸へ法印の有ける所へ送るとて、人夫に野菜を持せ遣す。門の警固、武略とは知す扉を開き入れけるに、竹井が被官大槻源内・小林亦三郎透間なく走入り、久式が妻子を捕へたり。居合しける者共二三十人、すはや遁すなと聲をかけ、或は鑓本を甘<sub>ニ</sub>げ或は鎗薙刀を提<sub>ニ</sub>げ一同に懸りけれ共、主君の妻子を人質に取らるれば、番の者共手を失ひ、椽の上に飛上り飛下り進退已に窮れり。敵方には相圖の聲を聞き土井<sub>原</sub>・工藤・田中・蜂屋・肥田・土師・神原以下數百人、天神丸に押入り関を嚙とぞ上にける。去れ共本丸には少も不<sub>レ</sub>騒、元親を初め物具堅めて件の奴原心替りしたらん、大松山三本松の者共はよも替る事は非じと云へば、石川久式は天神丸の守禦と云ひ、妻子共の行末と云ひ覺束なく思ひつゝ、鎧の上帯しめながら相畑に馳向ふ。元親屹と見て、暫く御待候へ。大松山の勢を可<sub>ニ</sub>相催<sub>一</sub>と草摺を取て引留む。久式心はせきあへね共、勢の寄をぞ待居ける。敗軍の有様は目もあてられぬ次第也。

### 松山落城之事

斯て大松山の守禦三村左馬助親重・大兵衛尉親當、三本松の守禦親氏、佐内丸の守禦三村助左衛門尉親友・法重六郎左衛門・同右馬之介・河上孫九郎・渡邊左京之進一騎當千の兵へ、早使をたて、申遣しけるは、天神丸へ今日可<sub>ニ</sub>押入<sub>一</sub>一條、早く陣具を調へ馳出らるべし。渡邊左京之進は河上因幡が丸に放火し、一門妻子を大松山へ荅ませよ。相畑へは火矢を射懸くべし。早々天神山へ可<sub>レ</sub>寄と、大松山其外渡邊平三・同藤内・平松、西は大強下原邊迄相觸れけり。

\*別本南江は南郷、升原は神原、布寄は布施に作る

\*別本、軍書にも見可勝兆一則退之、見不可勝之粒、見進之粒と見ゆれば危き軍は云々

各一等の返事には、主君の爲死を致す事塵芥とも不存、但責口違はゞ粉骨の働き御覽に及ぼしがたき也。是御暇乞にて候也と早速御返事申し、物具かためて出立たり。然る所に大松山・三本松の間に小屋五六百間有り。其中の男女俄にふためき騒ぎけり。こは如何にと見る所に、老人立出て云ひけるは、天神丸を責落す共今日の生涯明日にも不延、早敵數千騎甲の星を並て岸根に押寄す。魚梁庭の前後に旗三流翻るは、定て隆景にて有らん。天神丸も彌々勝にのるべし。運を開かん事難かるべし。只今猛火の中に妻子從類果つべき事眼前也。先天神丸へ相與し、數千人の命を扶くるべしと評議すれば、命を助くる助言には不願者<sup>願イ</sup>なかりけり。中にも心剛なる者共は本丸に籠らんと、子出づれば親引留め、親出づれば妻子悲歎す、兎角しける間に三村親成押入り、拔々に人質を取る。喚叫の聲々は、偏に罪人の獄卒の手に渡るも斯やと思ひ知られたり。天神丸よりは相畑に火をかけ、火急に責めかくれば、相畑の者共は妻や子共々行きもつれ、きたなき降參をぞしたりける。其人々には樂々<sup>サ</sup>尾豊後守・杉三郎兵衛尉・輒所<sup>輒訪イ</sup>藤介・南江備前守・升原内藏助・布寄・佐藤右京之進・同右京亮・石田與市左衛門・同氏備前守・神崎豊後守・同兵衛左衛門・山本左馬助、其外士卒數百人、皆本丸へ弓を引く。中にも吉良常陸守・神原與三左衛門尉、妻や子供を引具して、本丸へ入れり。次に芦雪と云ふ盲目の禪門あり。是も本丸へ入る。本丸には大松山の兵を第一頼みに思ふ所に、初の返事背いて皆忽に翻れば、元親大きに驚き、己に軍の評議を替へんとせし所に、馬醉木<sup>アモビ</sup>の守禦新山支蕃<sup>介イ</sup>之助家住進み出て、時日を延しては叶ふまじ。明日にも成り候はゞ敵勢彌々可加、今能き時節と存する也と云へば、元親譜代の者どもも尤と同じける所に、元親暫く思案して、天神丸の兵は多は勢ひ得る者也。味方は大半氣を失ふ者共なれば、仕損ぜんは必定也。危き軍は無用たるべしと云へり。時に田中藤兵衛と云ふ者進出て、軍の法は時に隨て變化すべし。今日の軍は我等に御任せ候へと不憚申上ければ、元親良々有て、文士は賤教に隨ひ、國主は民口を恥よと云へばとて、曲て其儀に同じける。然る所に、軍兵三百騎惣門に聚りけり。元親も久式も共に障子瀧まで馳出で、三村與七郎・梶屋織部・田井又十郎・上田加介を始めとして、相畑の城戸より逆茂木散々に引破り、家々に火を懸け、此頃心替りして比興を現せし奴原、主君の恩を忘れたる天罰端的にてはなきか、思ひしれと旬れば、旬々天神丸へ引退く。去れども

\*一、寄せし計なるべし(イ)  
\*二、色を替へ様を替へて操りければ(イ)  
\*三、脱甲城を云々(イ)

\*四、史籍集覽本備中兵亂記には遠都を一矢都一中國兵亂記には「甫城」備中集成志には「遠城」に作る。  
\*五、誠に山雲海月の馴染なれとて(イ)

本丸の兵は、一人當千と頼にかけし大松山勢、案の外に翻れば、大に氣を失ひけり。危に臨ても不<sub>レ</sub>變<sub>レ</sub>心は大丈夫と云ふぞと、互に教訓は仕合ひけれ共、已に不<sub>レ</sub>移<sub>レ</sub>時日<sub>一</sub>藝陣本丸へ押寄すれば、叶はじとや思ひけん、二十日の暮方に小原主計・南江馬右衛門を始として、近習の者共五十餘人引退しかば、元親廣縁に躍出て、聲をかくれども不<sub>レ</sub>顧、只一文字に相畑指して入りにけり。敵は追々に加り、猿屋・高陣・傾城が尾・松岩・院軸<sub>輪イ</sub>の林に至るまで如<sub>二</sub>雲霞<sub>一</sub>充満せり。去れども本丸堅固に抱へければ、藝州の兵兒玉三郎左衛門尉・井上又左衛門尉密に評定す<sub>軍議イ</sub>。此城三日停滯せば軍兵多可<sub>レ</sub>損。其故は元親と双<sub>枕</sub>討死せん<sub>と</sub>相窮めたる者計残りたるべし。窮鼠返<sub>又</sub>て猫を嚙むと云へば、今此紛れに攻め落せとて手を盡すと云へども、彌々無<sub>レ</sub>別條<sub>一</sub>控へたり。馬醉木は新山家住ふまへ、勢籠ヶ檀は田井長門守・同左近承・阿部市介・田中藤兵衛・同左京進・堺和左助・野口等を始として、屈強の兵二百騎計にて控へたり。一旦には攻落すべき様もなし、藝陣重て術を替へ、二十一日の早旦には馬醉木・勢籠ヶ檀へ先矢文を射て、其意を見んには不<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>とて、薄篋の矢に計策の状を付て射込めば、籠城の兵共寄り集まり、是は唯たばかりて討<sub>一</sub>つなるべし。只々一所に腹可<sub>レ</sub>切と決定すれども、色<sub>を</sub>替<sub>へ</sub>て申送りければ、二十一日酉の刻に弛<sub>弦</sub>脱<sub>甲</sub>降<sub>人</sub>にこそは出にけれ。淺間しかりし事共なり。

### 甫一檢校之事

爰<sub>西</sub>に遠都と云ふ座頭あり元來都の者也しが平家を語る事當時無<sub>レ</sub>双<sub>一</sub>の名を得、敷島の道にも不<sub>レ</sub>暗。一年京都の騷動故、生年十八歳の時此國へ下向し、偏に元親を頼みよる。元親仁愛厚き人なれば憐みを加へ位を勾當に進め、天正二年の秋の頃檢校迄に進めて、甫一檢校とぞ號しける。彼甫一も深恩を感じ、松山籠城の由を聞て遠路の波濤を凌ぎ、天正三年中春の頃當國に下向して、國中戦場の事なれば夜となく晝となく山川嶮路を不<sub>レ</sub>憚、漸く松山へ忍入る。元親對面ありて、盲人の是迄の志<sub>を</sub>誠<sub>に</sub>に<sub>山</sub>海<sub>を</sub>隔<sub>て</sub>し日頃風月の馴染なれとて、愁眉を開き積情を散ぜし也。斯て急なる時節なれば何れの口へなりとも忍通り、歸洛あれと進<sub>進</sub>むれ共、さすが名残や惜かりけん、一日二日と相延

びて落城迄ぞ留れり。已に二十一日の暮方に、甫一を馬酔木より送り出す。惡黨是を見て、いざやたばかり衣裳を剥ぎ取らんとて、相語らひ送りつれて溪路を下る。麓にて惡黨共の耳語きこく聲を聞付て、すはや時節到來すと心得て、暫しとて左の手をあげて、辭世かと覺えて「都にも」と五文字を唱へける所を、只一打に頸を刃る。又中村吉右衛門尉家好と云ふ亂舞の藝者元親に隨身す。是も甫一と一列に馬酔木より下りけるが、甫一の有様を見て不し適とや思ひけん、走り懸り日名源六郎と云ふ者の頸丁と打落す。しれ者こそ有れとて、數十人立向ひ即時に切伏せたり。誠に一藝に名有る者共なれば不惜人はなかりけり。

### 元親落阿部山事

五月二十一日の暮方に、馬酔木勢籠ケ檀の兵鬪るを聞て、渡邊市郎兵衛尉、其外南江・山川兩家の者共も、懸落する者共を留る由にて、是も同く落失にけり、残り留る人とは、吉良常陸守・同七郎左衛門・輕部・布施・三村・大藏右京亮・石川久式・雄西堂、其外八田・木村・樂々尾・山口・内田・八木・上田・梶屋梶織部・舞の彌介・同甚六・兒阿彌、總べて勇兵五十騎計なり。中にも二十四人は一間所に集り、今生の事は申に不し及、死出の山迄御供申すべしと誓ひしかば、元親笑を含みて、君臣の道、忠義の誠、日月末落地と喜悅の色を顯せり。扱新席并衣裳迄寄せ、腹切らんと座敷を作り盃を廻し、如何に各辭世はなきかと宣へば、芦雪と云ふ盲人計り懷中より短冊一つ取出す。元親一覽有所に、早馬酔木より鼻の丸へ火を懸け、大手より障子ケ瀧へ焼上り、折節辰巳より吹きける風即時に吹きかけ、麓一里四方は如畫成りにけり。元親は只疾く敵近づけかし、腹切らんと計云ひける所に、久式押留め、一先遠島へも落行き給へ。天神高田堅固にあれば落處の頼みも候也。先一身を保ち給ひて、信長の兼約豊後の誓紙をも御守り候へかしと強て申しければ、元親あざ笑て、遠き味方の頼みも此時節は無無用なり之、縱へ明日は天下の主と成るとても、流石清和の始を汚す事、返すくも口惜しかるべしと宣へば、久式、仰尤也。乍な去名を萬代に残すとも、屍の鬱憤を散じたるためしはあらし。是より船際迄は御供申すべし。自然の時を存じ、候て飛渡りの使をも求置候へと云へば、元親聞て

\*死して名を萬  
世に残すとも  
(イ)

\*阿州を促し因丹を催し(イ)

左もありぬべし。乍去某においては其儀なし。御邊は一先讃岐の方へ忍び落ちて、阿州\*の役、因丹を催し、重て本懐を遂げられれば草葉の影にても憤りを散ぜん、心強く辭すれども、久式色をかへて、御爲を存る故某居城をも捨退き一所に籠城す。爲誰にか命を惜むべき。八幡も御照覽あれ、一足も引まじく候と高聲に諫むれば、元親の家人ども、主君の腹切らん時見捨てんも口惜かるべし。義思へば忽ち命を失ふ。所詮一先引落し、山下に見失ひたる様にして散々に可成と心底に思入れ、久式と一同に口を揃て諫言す。元親情々思案して、一人の覺悟にて數人の命を失はん事も不便也。一先久式を落し置き、岸より立歸り腹可切と決定して、去らばとて上下一度に座敷を立つ。中にも舞の彌介は、暫くと甲を脱て彼所に捨て、跪て申けるは、某年考い候へば遠路の御供成がたし。是迄こそと云ふまゝに、鎧の袖を押しまくり、已に脇指を抜かんとす。元親屹と見て彌介が右の腕をひしと取り、我遠路を凌がんことは期しがたし。先途紫が先途イは此時ぞ、しばし止れと有りければ、無是非一仰に隨へり。久式塀に手を懸けると、元親取て返し本丸へ上らんとす。久式抜かされじと引返す。家人共は兩將の齟齬を取て押出し、二十餘人取次しよるになつて、五月二十二日闇を返路の幸と數百尋の岩石片時の間につく。元親は細道細露イよりすべり落て、大石に當て肩をつき正氣已に絶んとす。一族付慕ふ者共も、跡より敵の進み來ると心は急ぐ落路の闇に、元親は早息絶えぬと見捨て、散々にこそは成りにけり。年頃召使ひける同朋兒阿彌・中間加介は元親退出あれども不知由にて夜廻りせしが、いつの間にか追付きけん、つゝと寄て元親の手を引立て肩にかけ、兒阿彌・加介・彌介・石田・内田主従六人、高橋川を打渡り阿部山差して入りにけり。二町計を行く所に又太刀の鞘走て右の膝の口深く切りかたけり。又素足にて有りければ、左の踵を一文字に踏切り一步みも不叶。元親涙を流し、天道吾をすつるか。汝等四五人は従ひたりとて何の奇特もあるまじければ、松山へ還て各一身をも立てよとて、加介に國光の長刀を賜はる。石田が親は敵方にあり、頼寄る方も有るべしとて暇を給りぬ。扱内田は數多の妻子を打捨て、是迄の比類なき働也。降人に出て妻や子供を尋ねよと兼光の刀を遣せば、三人一同に涙に咽び御返事申さざりしが、何となく還り行く。今は兒阿彌・彌介兩人残り、元親の手(右左の手をイ)を取て彌深く藪中へ引入れ、膝を枕にさせまゐらせ、胸より足\*へ摩でさすれ共、人の心地もなければ只さ

めくくと泣居たり。兒阿彌つくく々と案するに、氣色正くまし／＼とて、吾等最後の働をも御覽するにあらざれば、犬死して何かせん。落行かばやと思ひ、二十二日の戌の刻に側なる小山にかけ上り、四方を見廻す由にて終に捨て、ぞ返りける。舞の彌介は是を見て無便思へ共、心弱くて叶ふまじ。よし／＼爰にて自害すべし。比興成る哉御家人等、死出の山まで付慕はんと、誓ひし事も虚ら言にて、阿部山迄も不來と獨言して徘徊せしが、又思ふ様、昔越後の忠太光家が木曾義仲に先達て自害せし事、詮なきやうに語り傳はれば、元親存命の間は可付慕と思定む。明れば二十三日辰の刻に、元親氣色少し快くなり、如何に彌介、扱兒阿彌はと御尋あれば、昨日戌の刻に欠落仕る由申す。元親心細く思ひ、我世に有ん時二世までと慕ひし者共も、却て比興の魁しける所に、汝一人残り居たる覺悟の程こそ淺からぬ。彌介承り、我二代の御厚恩を蒙る事誠に以て不輕。報謝しがたしと存する故、更に命を不懼、爰に存じ出せる事の候。某は松山の岸根に上り、元親と名乗て腹切るべし。其間に中津井口を目にかけて高田の方へ忍び給へと云へば、元親聞て、昔前漢の高祖の城を楚の項羽が責し時、紀信が諫に相似たりと感喜更に不斜。我身の疵多く露命續き難し。斯く云ふ間にも如何なる下輩の手に可懸も不不知。汝は急ぎ松山へ上り檢使を乞へ、腹切るべしとあれば、正き主君を殺す敵を迎に行く事候まじ。たとへ罷上り候共、身命助らん爲にたばかりに心得、言の下に可誅と申す。尤也。其印には袂を切り可遣。又老母の方へは鬢の髪を可遣。若亦不歸來ば供佛施僧の營を頼むぞと再三進むれども、兎角の返事も不申。明れば二十四日の早旦に又彌介を召寄せ、只疾く登城せよ。消えかゝる露の身の置所なきに付ても、益なき日を送るぞとて、理を分けてぞ口説き給へば、彌介承り、誠に敬は隨へとこそ申候へとて、御印の物御形見の鬢の髪をとりそへ、高橋川を渡りしが、幾度思返しても君を殺害の使難。心得。所詮敵の中へ馳入り討死すべしと志し、敵陣數百人の待懸けたる真中へ行き向へば、即時に搦取て彼の印と鬢の髪の出來を尋ねたれ共本より思ひ定めたる事なれば、子細に不唯疾く殺せと云ひ、二十六日の辰の刻に終に空敷成にけり。松柏は彰於歲寒。貞臣は見於國危と云へば、心の操正き下藪かなと感ぜぬ人は無かりけり。

## 卷之 下

### 元親最後之事

修理進元親は彌介が討死せしとは不<sub>レ</sub>知、檢使を請來らん今や遅しと待暮す。餘りに無<sub>レ</sub>覺束<sub>レ</sub>思ひつゝ小高き所に上り四方を見廻せば、松山程近く見ゆる情<sub>ニ</sub>思へば彼の山にて自害せざる事こそ今生の後悔、後生の障りとも成るべけれ。松山に尋ね寄り城主へ案内を遂げ、腹切るべしと思ひ、六月朔日夜半計に頼久寺に入り、亡父の塔頭に腹切らんとせしかど、も亦思返し、元親最後の程も不<sub>レ</sub>知と世人の云はんも可<sub>レ</sub>惜<sub>ニ</sub>又松山に上りなば名もなき者に行合て、無<sub>レ</sub>由死を致さんも詮なしと思案を廻らし、自ら羽織の裾を切り小篠にはさみ、松蓮寺の後口へ忍び行て古小塚の邊に指置き、明れば六月二日の曉に大道の畔に憩ふ。二日巳の刻計に、樵夫一人通り過る。元親招き寄せて城内の有様を問へば、藝州の人々御座すと答ふ。汝は松山に上りて、元親痛手を負て山路にあり。檢使を給らば出て腹切るべしと云ひ送れと云へば、彼男恩賞を請んと、大將小早川の陣に斯と告る。去らば檢使を遣せとて、粟屋與三左衛門尉元方を始として、兒玉・栗原・三宅以下各馳せ下る。元親粟屋を見て舊友の誼あれば介錯を可<sub>レ</sub>頼。今度城中にて腹切らざる事慚愧の至に存する也。檢使の旁々愚意の趣隆景へ御物語候へ。今度謀叛を企る事、亡父家親の爲め宇喜多に鬱憤を存する事、曾て以て無<sub>レ</sub>紛、吾亡父の爲なれば天道に背くにも非じ。偏に武運の薄き事を恨むる也。扱城内にて不<sub>レ</sub>果事は久式が進めによれり。一先久式を落し置き、立歸りて腹切らんとせし所に、再三家人共に被<sub>レ</sub>押立、無<sub>レ</sub>是非<sub>ニ</sub>麓に下る也。家僕共の心には路にて見失ひたる様にして、逃去るべしとの事也とは、今こそ思ひ當れりと、始終段々語れば、檢使の武士皆一同に感歎す。扱重ね疊の上に座し各へ盃を指し、談笑如<sub>レ</sub>常にて、暫く座を立ち手水をつかひ、又本の座に還て粟屋を頼み硯を乞て筆を染ゆ、最後の一首を必届けて給はれと念頃<sub>ニ</sub>契約して、隆景へ書一通<sub>ニ</sub>諸事の子細を述させらる。次に細山兵部少輔殿へ一首、

一度は都の月と思ひしに我待まつつ夏の雲にかくる、  
 是は年來因深き故、今度籠城以來八雲集一部贈り寄せらる。此歌書は世に稀なるを、公家中へ頼て新に書寫し、下しける心の程こそやさしけれ。又武田法印は、元親一族にて、夷洛往來の傳つて毎に至情ありければ、一首、

言の葉のつてのみ聞て徒に此世の夢よあはて覺めぬる

又大庭加賀殿は、輝元へ歌道の指南あり。學業多才にして交情不レ淺バ口號ゴウガクとて一首、

殘し置く言の葉草の影迄もあはれをかけて君ぞ問ふべき

老母へは、形見の文に候とて自筆に認む。授辭世の物語りあり。去る二十一日の暮方に、腹切るべしと思ひつゝ位牌を書て、其上に、

思ひしれば行歸るべき路もなし本の眞を其儘にして

と書、八雲集の内に入置しかども、無レ是非落行きて懶き日數を送りけり。末後の一句なれとて、又一首、

人といふ各をかる程や末の露消てそ歸る本の雲に

前匠作一瞬源樹居士

と書留て、腰の物を抜き粟屋に渡し、帷子の襟を押しさげ、案内申時頸打たまへと詞をかけ居なほる。粟屋西へ向ひ給へと云へば、十方佛土中何れを佛土に指べきやと拔身を持たながら合掌して、罐湯爐炭清涼殿劍樹刀山遊戯城と唱へ終て、脇指を左の脇に突立て、右の脇に引廻し、胸の下程にて柄も拳も摧けよと押入れ、聲をかかると頸を打落す。六月二日の晩景に頸を取て桶に入り、本陣指して送りける。見る人涙を催す計也。千兵は得易く一將は難レ求、と惜まぬ人は無かりけり。

### 勝法師丸被誅事

爰に三村元親の子息勝法師丸く、石川久式の子息をば、備前國の住人伊賀左衛門尉久隆生虜り本陣へ渡しける。久式の子息をば當國井山に送られけり。勝法師丸は生年八歳也けるが、容貌甚優にして手跡他に越えたり誠に風華に

\*風光雪月詩歌  
 の會共に心を  
 慰めて誠に榮  
 華に送りしも  
 (イ)

\*二、以下句六字  
別本なし

\*三、以下一句八  
字別本なし

雪月に、詩歌の會に心を慰めて、榮華に日を送りしも、（替らす）忽昔に成果て、今は陣屋に身をやつす。思出れば古後醍醐の皇子、八歳の宮だにも愛別離苦は御座まして、（やイ）

つくくと思ひくらして入相の鐘を聞にも君ぞ戀しき

と詠じ給ひし言の葉の、（寄せらる、イ）過ぎし昔の哀れ迄、今こそ思ひ知られたれ。已に久隆本陣に送りける時、惣金の扇に古歌を書き、勝法師丸へ参らする。（寄せらる、イ）勝法師丸扇を開き見れば、

夢の世に幻の身の生れ來て露に宿かる香の稻妻

と詠じ、扱は本陣に行きなば殺さるべき事必定也。脇指今まで持つならば自害すべしと後悔あれば、人々感涙催し、助け置き出家にもなすべしと相議する所に、又番の衆中へ語りつるは、我久隆より送られし時、路にて本の家人共に行逢へり。彼等乗打して君臣の禮儀を失ふよし某申せば、背かるゝ程の主人なれば一入恥辱也。（期申も、イ）各歴々前後に有りしかば乗打するは無禮也。何れも如何にとあれば、聞く人皆感じて舌をぞ震ひける。則隆景へ斯と告ぐれば隆景聞てそれ程の口才は實しからずと思ひ、又別人へ私に尋ねしかば有のまゝに語りけり。扱は扶け置かば弓矢の種なり。事六ヶ敷ぞとて誅せらる。一家滅亡の時節到來なれば、實に哀れにぞ聞えける。人生識事憂患之始也とは勝法師丸の事成りける。石川久式・三村・大庭・吉良常陸・同七郎左衛門・布施以下迄の死期の働き驚目計也。或は組討、或は指違へ、二十六日（三）の一日に朝の露と消失せぬ。三村右京進政親父子三人は、作州路より因州へ忍び行くとぞ聞えける。

### 常山城没落附女軍之事終 備前兒島の内也

六月四日成羽には諸軍勢を催し、常山表へ陣を移す。常山の城主三村上野之介高德曰ひけるは、某多年藝州に對し鬱憤ある故、元親謀叛の張本は第二某也。然るに元親無下に生害に及べば、生て何の面目かあらん。一日も早く死地に可赴とこそ思へとて、騒ぐ氣色もなかりけり。家の子郎等取々に、一先阿波讃岐の方へも渡海あれかしと諫む

\*巨耐なる奴原哉(イ)

れど、も阿讀の沙汰は無益也。我累年眞之を頼み・既に此度人質として實子を差渡し加勢を乞ひしかども、其甲斐なければ弓矢の頼みも盡にけり。郎等どもは是を聞いて、思々に駈落する者もあり。弛弦降參する者もあり、或は小船に取乗り櫓よ梶よと云ふ間に、敵追ひかけ討果す者もあり。早散々に成りしかば、六月六日の晩景に、小早川の魁浦野兵部丞宗勝岸根に旗を上げ、先陣の兵數千人の丸へ責入て、太刀をひらめかし靱を鳴して、鬨を腫とぞ上げたりけり。高徳少しも不驕命を助からんとする者こそ鬨の聲には驚くべけれ。明日の辰の刻には大矢倉にて一類腹を切り、名を後代の記録に留むべくとて、靜り返て居りけり。敵陣は彌々惡口し、小船に取乗り島へ渡るか、水練に入るかせば、責口の油斷に可成ぞとて、逆茂木をかなぐりすてをめき叫んでかゝりける。高徳立出て、たへがたき奴原哉、いで高徳が最後の働き見せんと云儘に、鐵炮おつとり廣椽に躍出て、二つ玉にて透間なく放ち懸る。嫡子源五郎高透平生は強弓の數寄にて、竿打たる弓を射けるが、是も共に鐵炮を放つ。高徳の舍弟小七郎は、弓を打捨て切て懸り、互に聲を合せて戦ふ。手負死人十四五騎片時の間に見ゆれば、早速其日の陣を引にけり。明れば七日の曉、城内酒宴の聲聞ゆ。多くは女性の聲にて互に別を惜む盃を指す。同日辰の刻、敵軍へ向て一類自害の由を告ぬれば、人々我先にと出合ひたり。高徳の繼母は五十七歳、先一番に自害せし時、我世に留りて斯るうきめを見る事も、前世の業因不淺。高徳藝州に遺恨を含み、入道せられし事をだに世に懶く思ひしに、腹切給はんを見るならば、目もくれ心も聞ゆべし。暫時も跡に残らんより先達て自害すべしとて、椽の柱に刀の柄を卷付け、其儘行掛り貫ぬきける所に、高徳走寄て五逆罪恐しくは候得共とて、御頸を討落せり。投嫡子源五郎高透生年十五歳、父高徳の御介錯を仕度候へども、跡に残らば少年故、未練もや仕らんと心残りや思ひ給はん。逆にては候へ共先腹切るべしと云へば、高徳聞て、愚息ながらも神妙也とて、扇を開きあふぎながら顔をつくんと見て、水の泡、草も露となさん事、後世の障共なるべしと暫く袖をぬらしける。高透も脆き涙を押留ゆ、其儘雪の肌を押はだぬき、腹十文字にかき切りうつぶしに成る所を、高徳頸を打落す。舍弟の八歳に成りけるを傍に引付、肝のたばねを二つ通して押寄せたり。(通して退)高徳の妹に十六歳に成る姫あり。藝州鼻高山の大將は高徳の弟なれば、此姫には鼻高山へ退き給へ

\*一、嫉妬妄執の罪深く(イ)

\*二、同じ嵐に倡行(イ)

\*三、前掲「浦野」とあり

\*四、以下四字別本無し

\*五、手負ふ者若干多し(イ)  
\*六、以下の一句十三字別本なし

と進むれ共、思も不<sub>レ</sub>寄事也とて、老母の抜ける刀にて乳のあたりを突き貫き、是も同時に自害せり。次に高德の女房は、修理進元親の妹にて、日頃も男子に越たる勇力あり。我女性の身なりとも、そも武士の妻や子が、最後に敵一騎も不<sub>レ</sub>討してやみ<sub>レ</sub>と自害せん事、返す<sub>レ</sub>も口惜かるべし。況や三好修理太夫従弟叛逆の一族と云ひ、女人の身成り共一軍せでは叶ふまじと、鎧取て着、上帯しめ、大刀をはき、長なる黒髪解て颯と亂し、三枚甲の緒をしめ、紅の薄衣を取て着、裳を引上げ腰にて結び、白柄の薙刀小脇に挟て廣庭に躍出たれば、春日の局其外青女房端下に至る迄三十四餘人、是は如何成る御所存にて候ぞや。いとどだに女人は五障<sub>一</sub>三從の罪深く、不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>成佛と申候に、況や修羅の罪業争でか免れ給ふべき。唯思留り給ひて心靜に自害をせさせ給へやと、鎧の袖を控へしかば、彼の女房打笑ひ、御身達は女性の身なれば敵強ちに害すべからず。何國へも一先忍び給ひ、若自害をせさせ給ふとも念佛能く申して、後世を助かり給ふべし。自は邪正一如と立て、斯る戰場をば西方淨土とし、修羅の苦患も極樂となし候へば、何か苦かるべしと袖引放ち出行けば、我をば扱は捨て給ふかや。迎も可<sub>レ</sub>散華ならば同じ嵐に誘はれて、死出三途の御供仕らんと、髪かき亂し鉢巻をしめ、髪や彼所に立て置きし長柄の鎗を掲げて、三十餘人蒐出れば、累年芳恩の家僕共是を見て、八十三騎死を一舉に蒐出たり。寄手此形勢を見て、敵只今妻子を先立て降人に出ぬと思ふが中に、小早川の先鋒浦<sub>三</sub>兵部丞宗勝が七百餘騎の眞中に喚て蒐入る。宗勝屹と見て、敵女人の装束して寄來るこそ怪しけれ。是處女の如くし脱兎が功を作す謀と、孫子が秘する所、虚は實と云へるも斯る謀をや可<sub>レ</sub>謂。欺かれて、不覺をとるな面々と、陣を固て控へしかば、敢て敗る事あたはず。去れども舟強<sub>一</sub>の勇士死を一場に輕じて一面目に突立たれば、寄手足を亂し疵を被り、死を致す者百餘騎、周章騒ぐ氣にのりて高德の女房、腰より銀の采配を拔出し眞前に進て、蒐<sub>三</sub>敗れ者共と大勢に割て入る。宗勝が兵流石武勇を嗜めば女人に向ふ者はなし。勇騎直に鎗を合する所に、女性傍よりつい潜て、ぽかと突ば、手負ふ者數を不<sub>レ</sub>知。暫く戦ふ其間に、寄手の大勢馳寄り<sub>レ</sub>責戦へば、高德の兵一騎も不<sub>レ</sub>殘なりにけり。高德の女房浦<sub>六</sub>兵部丞が馬前に蒐留り、大音にて匂りけるは。如何に宗勝、御邊は西國にて勇士の名を得給ふと聞く。我女人の身と云とも一勝負仕らん。そこ引給ふな浦の殿と、喚き叫で長刀を水車にま

はして蒐寄せたり。兵部承四五間計跡にすさり、いや／＼御邊は鬼にてもあれ女也。武士の相手には成りがたしと身をかいひけば、傍なる兵五十餘騎蒐りけるを、長刀取伸べて七騎雜伏せ、薄手を負て又大音にて、女の首取んとはしすな人々と呼はり、腰より三尺七寸の太刀を拔出し是は我家の重代國平が作也。此太刀一度先父家親に參らせ、家親秘藏他に異なると云へども、重代のよしを聞及て返し置きし太刀なれば、父家親に副ひ奉ると思ひ、身を不<sub>レ</sub>放持來りし也。死後には宗勝に進ずる也。後世弔て給へやと云ひ捨て、城中に蒐入りし形勢は、唯、刀八毘沙門の喜見城を守護し給ふ時、吉詳天女諸共に、修羅を責討つ勢も、斯やと計思ひつゝ、見る人舌を不<sub>レ</sub>卷と云者なし。斯て西に向て手を合せ、我西方十萬億土の彌陀を頼むには非ず。己心の彌陀唯心の淨土今爰に現せり。嗚呼佛も如<sub>レ</sub>露亦如<sub>レ</sub>電と説き給ふ。誠に夢の世に幻の身の影留りて、露に宿かる稻妻の、早立歸る本の道、南無阿彌陀佛と念佛し、太刀を口に含て臥したるは、例し少き事ども也。扱高德も西に向ひ、南無西方教主の如來、今日三途の苦を離れ、元親・久式・元範・實親同じ蓮臺に迎へ給へと、念佛叫る聲の中より腹搔切れば、舍弟小七郎介請借してその身も自害し、高德の死骸に寄かゝり同じ枕に伏にけり。見る人聞く人おのづから皆涙をぞ催しける。頗多て數多の頸共を備後の國柄の浦に送りて、扱備中平均せしかば、各功の淺深に隨て恩賞を行はれ、毛利家の大將達歸陣あるこそ目出たけれ。

\*以下一本、數多の頸備後の國柄に送りさば功均せしかば功賞を行はれり

## 備中兵亂記終